

平成23年度第6回兵庫県立図書館利活用講座

村上春樹文学誕生の秘密

～上田秋成から20世紀アメリカの作家達～



(スコット&ゼルダ・フィッツジェラルド)

講師 溝口 めぐみ (兵庫県立図書館)

日時 平成23(2011)年9月17日(土)

午後1時30分～3時30分

場所 兵庫県立図書館 1階 第2研修室

1. はじめに

現在世界的作家となった兵庫県ゆかりの小説家村上春樹は、1979年30歳の時、『風の歌を聴け』で第22回群像新人文学賞を受賞、小説家としてデビューしました。

デビュー間もなくの1981年、作家村上龍との対談で、自分にとっての名文というのは以下のように語っています。「恥を知っている文章、志のある文章、少し自虐、自嘲気味ではあっても、心が外に向けて開かれている文章」、そしてそうした文章の書き手として具体的には、「スコット・フィッツジェラルド、カポーティ、上田秋成、少し質は違うけれどレイモンド・チャンドラー」「ヴォネガットもいい」といった作家を挙げています。（参14）〈注 参とは参考資料一覧〉

本日は、初期の作品を見ていきながら、村上春樹が彼ら傾倒した作家からどのように影響を受けて小説を創っていったか、そして、現在の村上春樹文学を構築していったのかを探っていきたいと思います。それから、この講座は、村上春樹の作品の内容に触れています。他の作家からの影響を語るためそうせざるをえません。ご了承ください。

2. 阪神間一の「読書少年」

村上春樹は、兵庫県の西宮、芦屋、神戸で10代まで過ごしました。

僕は戸籍上は京都の生まれだが、すぐに兵庫県西宮市の夙川（しゅくがわ）というところに移り、まもなくとなりの芦屋市に引っ越し、十代の大半をここで送った。高校は神戸の山の手にあっただので、したがって遊びに行くのは当然神戸のダウンタウン、三宮あたりということになる。そのようにしてひとりの典型的な『阪神間少年』ができあがる。（参15）

共に国語教師の両親の一人息子でした。そして、1981年の対談で、「ぼくが小さいころね、（父親が）『枕草子』とか『平家物語』とかやらせるのね。」（参14）と語っています。「やらせるのね」とは、素読をさせられていたのではないかと推測します。その結果、『徒然草』『枕草子』『平家物語』を大人になっても暗記しているそうです。その上、子どもの頃の食卓の話題が『万葉集』だったそうで、両親の息子への日本の古典文学スパルタ教育は徹底していたようです。

さらに村上春樹ファンには有名な話があります。

僕の家はごく普通の暮しむきの家だったけれど、父親が本好きだったので僕は近所の本屋でついで好きな本を買うことを許されていた。（参16）

当然、大変な読書少年となりました。その上、

昔話をつづけると当時（一九六〇年代前半）僕の家は毎月河出書房の『世界文学全集』と中央公論社の『世界の歴史』を一冊ずつ書店に配達してもらっていて、僕はそれを一冊一冊読み上げながら十代を送った。（参16）

本を読むのが好きで好きでしかたがない少年、しかし、一般的には、変わった子どもに見えたのではないのでしょうか。

本への愛情を率直に書いているのは雑誌『anan』連載の「村上ラヂオ」の「本が好きだった」という章です。（新刊『おおきなかぶ、むずかしいアボカド 村上ラヂオ2』に所収）

十代の頃は本が何より好きだった。学校の図書館に箱入りの新刊が入ると、司書の女性に頼んで不要の空き箱をもらい、その匂いをただくんくん嗅いでいた。それだけで幸福だった。そこまでマニアックに書物に惹かれていた。もちろん匂いを嗅ぐだけではなく、読むこともよく読んだ。（中略）各種の文学全集を片端から読破した。中学高校時代を通して、僕よりたくさん本を読む人に巡り合ったことがない。（参1）

当然のように、小学生時代から作文が上手でした。西宮市立香櫨園小学校卒業文集に全生徒を代表して「青いぶどう」という作文を書いています。昨年、「トークイベント 村上春樹をたどるたび」（参51）というイベントでこの作文が読まれましたが、小学生とは思えない見事さに会場内から「ホー！」という驚きの声が上がりました。

僕は読書感想文を書くのがうまくて、他人のぶんまで（昼飯をおごってもらうくらいのギャラで）書いてあげていました。（参19）

という、たぶん高校時代のことだろう、ちゃっかりエピソードもあります。兵庫県立神戸高校時代になると、ダウンタウン三宮で遊ぶようになりました。

古本屋で安いペーパーバックを漁ったり、ジャズ喫茶に入り浸ったり、アートシアターでヌーヴェルヴァーグの映画を見ることもできた。（参15）

「古本屋で安いペーパーバックを漁ったり」とは、神戸の古書店に売っていたアメリカの安い小説のことです。高校生になった村上春樹は、父親による日本古典英才教育に対し、

「でね、もう、やだ、やだと思ったわけ。それで外国の小説ばかり読みはじめたんですよね。」（参14）となりました。阪神間少年版「理由なき反抗」ですね。

とにかく、阪神間一読書少年であった、その上で、しっかりと身体にしみ込んだ「日本古典」と、のめり込んでいった「アメリカ現代小説を中心とした外国文学」が、作家村上春樹の土台となっていたのです。別な言い方をすれば、10代から20代にかけて、特に近代日本文学に触れないで作家となったということにより、初期の村上春樹の作品に特異な印象を与えたのかもしれませんが。たとえば、太宰治は教科書で『走れメロス』を読んだだけだと語っています。（参14）

ここで興味深いのは、やはり小学校時代の両親（特に父親）の古典教育だと思います。一流の小説家になるためにはまず一流の読書家でなければならないといえます。いま世界的作家村上春樹を生み出したのは、一流の読書家村上春樹であると言えるでしょう。では、一流の読書家村上春樹を生み出したのは誰でしょうか？。私達の読書体験は通常、子どもの頃、たいてい絵本からはじまり、子ども向けの児童文学へと進んだ後、すぐれた文学作品へと進みます。村上春樹の場合、両親の古典教育が終了した（拒否しはじめた）とき、すでに一流の読書家だったのではないのでしょうか。そして、一流の読書家として29歳まで過ごしたあげくに『風の歌を聴け』を書いたのです。ということは、村上春樹文学にとって、両親の古典教育は非常に重要な役割を果たしていると思われます。

3. 早稲田大学と「ピーター・キャット」時代

1968年、村上春樹は故郷を去り、早稲田大学第一文学部演劇科へ進学しました。大学入学直後や大学生活については、『ノルウェイの森』が参考になるでしょう。ヒロインのひとり「緑」との出会いも、東京の下町育ちの陽子夫人との出会いを彷彿とさせます。大学1年生に出会った陽子夫人と3年後には学生結婚をし、1974年、夫人とともにジャズ喫茶「ピーター・キャット」を開業します。上に挙げた文章にも書いているように高校時代からジャズにものめりこんでいた村上春樹です。

結局僕にできることといえばジャズ喫茶くらいのものであった。とにかくジャズが好きだったし、ジャズに少しでもかかわる仕事をやりたかった。(参16)

それと同時に、京阪神出身ではない(チャキチャキの江戸っ子)陽子夫人との結婚と、「水商売」であるジャズ喫茶を開いたことから、村上春樹は芦屋に住む両親と上手くいかなくなったようです。

「ピーター・キャット」での村上春樹について、オランダ人の作家イアン・ブルマはこう書いています。

昼の間は喫茶店で、夜になるとアルコールが出る。その薄暗がりの中で村上はジャズのレコードをかけ、飲み物を作り、皿を洗った。そして、アメリカの小説を読んだ。おしゃべりは陽子が受け持った。このバーであの年月を過ごさなかったら、小説家にはなれなかったろうと村上は確信している。野球を見ていたあの日まで、村上は小説など書いたこともなかった。しかし、観察し、考える時間はあった。(参21)

同じく「ピーター・キャット」の村上春樹について、ジャズ評論家小野好恵は書いています。

店がヒマな時に彼がカウンターの隅で原書のペーパーバックを静かにひもといていた光景は忘れられない。彼が持っている誰にも侵すことのできない世界の強靱さを、私はその時に強く感じたけれど、それが現在のような形で結実するとは、もち論予想だにできないことだった。(参50)

この小野好恵に紹介されて「ピーター・キャット」へ行った作家中上健次との対談で、中上健次に「あなたはほとんどお客と口きかなかつたんじゃない？」と言われていました。

(参2) そんなことないと村上春樹は反論していますが、気難しそうなマスターに見えたのかもしれませんが。「ピーター・キャット」は、何度か場所を変えながらも流行っている店だったようです。

そして、1978年29歳の春、神宮球場で野球を見ながら(ヤクルトファン)「突然何かが書いてみたくなった」ので小説を書き始め、雑誌『群像』に応募し、1979年新人文学賞を受賞しました。それが、デビュー作『風の歌を聴け』です。なお、村上春樹は、「ピーター・キャット」を、長編第2作『1973年のピンボール』、『中国行きのスロウ・ボート』などの短編や翻訳執筆の後、手放し、フルタイムの作家となりました。

4. 「台所のテーブルから生まれた小説」

4-1 『風の歌を聴け』

1979年第22回群像新人文学賞を受賞のデビュー作『風の歌を聴け』、タイトルは、アメリカの20世紀の小説家トルーマン・カポーティの『シャット・ア・ファイナル・ドア（最後の扉を閉めろ）』という短編の最後の文章「何も思うまい。ただ風にだけ心を向けよう」から取っています。村上春樹は、大学受験用の副読本で『ヘッドレス・ホーク（無頭の鷹）』を読んでカポーティが好きになったそうです。（参4）オードリー・ヘプバーン主演の『ティファニーで朝食を』という映画の原作はカポーティで、2008年村上春樹訳が刊行されています。（参23）

『風の歌を聴け』は、1970年の夏、故郷の海辺の街に戻った「僕」が友人の「鼠」とジェイズ・バーで語り、4本指の女の子と親しくなるといった18日の間の物語です。

「店を閉めてから、台所のテーブルで、缶ビール飲みながら書いた。」「一時間ぐらいつづ書いていったから、チャプターが短いですね。」（参4）

と自身語っており、チャプターというか章が短く切ってできています。やはり、絶対的に時間が足りない状況の中、仕事を終えた深夜にキッチン・テーブルで書いていったのです。その時、参考になったのが、アメリカの作家リチャード・ブローティガンとカート・ヴォネガット（ジュニア）の小説でした。

リチャード・ブローティガンは、1960年代ヒッピー世代のスターのような存在だったようで、村上春樹の作品によく登場する“図書館”の原点は「ココ？」と思ってしまう不思議な図書館を舞台に、パツとしない図書館員が夢のような美女と恋に落ちるといったファンタジックな『愛のゆくえ』（原題『The Abortion』）や、えっという比喩や発想が面白く藤本和子訳が傑作な『アメリカの鱒釣り』などの作品があります。

カート・ヴォネガットは、写真を見るとひょうひょうとした人のように感じられますが、自身がドイツ捕虜であった際に体験した、第二次大戦末期、米英による「ドレスデン大空爆」をユーモアを交えた語り口で描いた『スローターハウス5』や現代アメリカ文明をシニカルに描いた『チャンピオンたちの朝食』などの作品があります。

全盛の日のリチャード・ブローティガンとカート・ヴォネガットに共通するものは、短いエピソードの積み重ね、断章のコラージュといった作風です（カート・ヴォネガットに至っては自らの作品に自らのイラストまで描いています）。いずれにせよ従来の小説作法とは全く違ったものです。村上春樹は、この二人の作品テクニクを使い、『風の歌を聴け』を書き始めます。

ヴォネガットの『スローターハウス5』には「そういうものだ」("So it goes.")という言葉が2~3p置きにまんべんなく使われています。これは、戦場における冷徹な現実を数行にまとめた後に「そういうものだ」とクールに感想を述べているのですが、たとえばヘミングウェイだったらその戦場における情景描写や心理描写にかなりの頁を費やしたでしょう。村上春樹は『風の歌を聴け』で、カート・ヴォネガットのテクニクを借用しています。比べてみましょう。

☆『スローターハウス 5』(参 26)

小男のアメリカ人は、ダイヤモンド、エメラルド、ルビーといった宝石類を一クォートほども持っていた。ドレスデン市内の地下室で見つかった死体の山から頂戴したのである。そういうものだ。(15p)

そのあたりのどこかで、哀れな中年のハイスクール教師エドガーが、地下墓地からティーポットを持ちだしたところを逮捕された。容疑は窃盗であった。彼は裁判にかけられ、銃殺された。そういうものだ。(252p)

☆『風の歌を聴け』(参 13)

鼠の小説には優れた点が二つある。まずセックス・シーンの無いことと、それから一人も人が死なないことだ。放って置いても人は死ぬし、女と寝る。そういうものだ。(22p)

僕は夏になって街に戻ると、いつも彼女と歩いた同じ道を歩き、倉庫の石段に腰を下ろして一人で海を眺める。泣きたいと思う時にはきまって涙が出てこない。そういうものだ。(118p)

また、『スローターハウス 5』にも登場しますが、『チャンピオンたちの朝食』では堂々主役の一人を演じる(架空の)SF作家「キルゴア・トラウト」と『風の歌を聴け』の「僕」が尊敬する(架空の)SF作家「デレク・ハートフィールド」にもカート・ヴォネガットとの共通項が見いだせます。

★キルゴア・トラウト

1907年～1981年 バミューダ生まれのSF作家。ニューヨーク州コーホーズに住む。小説が売れない頃、網戸と雨戸兼用アルミサッシの取り付け工を営む。1979年ノーベル医学賞受賞。著書『車輪の災厄』『踊るあほう』『調子はどうだい?』等。 <『チャンピオンたちの朝食』(参 27)より>

★デレク・ハートフィールド

1909年～1938年 アメリカ合衆国オハイオ州生まれの小説家。ハイスクール卒業後郵便局に勤めるが長続きせず、小説家以外にあり得ないと確信する。作品のほとんどは冒険小説と怪奇もの。1938年エンパイア・ステート・ビルの屋上から飛び降り自殺。著書『気分が良くて何が悪い?』『虹のまわりを一周半』『火星の井戸』等。

先にも述べたようにヴォネガットは、自作でイラストも自ら描いています。たとえば、

『チャンピオンたちの朝食』(133p)



『風の歌を聴け』で村上春樹も自分で描きました。(49p)



しかし、村上春樹文学登場の参考としてもっと重要と思われるのは、ブローティガンとヴォネガットの作品が「心理描写なしの小説」だったことでした。

日本のいわゆる「純文学」は、リアリズムの文体、心理描写がメインです。面倒なことを面倒に書くわけです。(中略)でも大学時代にリチャード・ブローティガンとかカート・ヴォネガットとかを読んだことで、心理描写みたいなことなしでも小説はまっとうに書けるんだと、目をひらかれたんです。(参5)

『風の歌を聴け』は、東京の大学に通う「僕」の夏休みの物語、つまり、青春小説です。村上春樹は「青春ストーリー」というものを次のように考えています。

青春あるいはアドレセンスというものは所詮ある種の虚構性の上に成立しているものであり、そこにリアリティーをこじつけようとする試みは必ず失敗に終る。必要なのはリアリティーを描くことではなく、リアリティーを的確に示唆することである。(参6)

この文章は、『ヤング・ゼネレーション』という映画の批評ですが、青春ストーリーに両親という「現実」を出したのは間違いだと言っています。恐らく、あまたの著作を読み、あまたの映画を見尽くした村上春樹が得た結論なのでしょう。『風の歌を聴け』では、たとえば主人公「僕」の父親について、「父親の靴を磨く」エピソードが語られるぐらいです。

ヴォネガットの小説と『風の歌を聴け』のよく似た文章をもう一ヶ所、挙げて見ましょう。

☆『スローターハウス 5』

クリスマスに、オヘアのところにその運転手からお祝いのカードが届いた。これが文面である—

貴方様はじめご家族の皆様ならびに御友人の方におかれましても、幸多いクリスマスと新年を迎えられんことをお祈り申し上げるとともに、偶然の気まぐれにより私達がいつかまた平和で自由な世界のタクシーのなかで出会う日が来ることを心から待ち望んでおります。

“偶然の気まぐれにより”というところが実にいい。(10p)

☆『風の歌を聴け』

三人目のガール・フレンドが死んだ半月後、僕はミシュレの「魔女」を読んでいた。優れた本だ。そこにこんな一節があった。

「ローレンヌ地方のすぐれた裁判官レミーは八百の魔女を焼いたが、この『恐怖政治』について勝誇っている。彼は言う。『私の正義はあまりにあまねきため、先日捕えられた十六名はひとが手を下すのを待たず、まず自らくびれてしまったほどである。』」（篠田浩一郎・訳）

私の正義はあまりにあまねきため、というところがなんともいえず良い。（66p）

ものの見事に村上春樹はカート・ヴォネガットの小説テクニクを使いこなしています。

群像新人文学賞選考委員の一人丸谷才一は、次のように選評しています。

村上春樹さんの『風の歌を聴け』は現代アメリカ小説の強い影響の下に出来あがったものです。カート・ヴォネガットとか、ブローティガンとか、そのへんの作風を非常に熱心に学んである。その勉強ぶりは大変なもので、よほどの才能の持主でなければこれだけ学び取ることはできません。（参 3）

村上春樹は、メール交換で読者に「ヴォネガットの文章はよく似ている」と言われ次のように返事をしています。

カート・ヴォネガット・ジュニアと、リチャード・ブローティガンは大学時代の僕のヒーローでした。はじめて読んで、『なーんだ。こんなんで小説になっちゃうんだ！』と目からうろこがぼろぼろ落ちたというかね（もちろん簡単そうに見えて、実際に文体を真似するのはまったく至難の業なんです）。ですから、もちろん影響はあります。とくに『風の歌を聴け』はそうですね。そのあとはどんどん離れていったように思いますけれど。（参 28）

もう少しだけた感じでは次のように言っています。

彼ら（ブローティガンとヴォネガット）の素敵なところは「お文学」していないところですね。（参 52）

「お文学」とは、笑えます。もちろん「純文学」の小説を皮肉っているのです。

群像新人文学賞の受賞のことばでは、やはりアメリカの 20 世紀初頭の作家スコット・フィッツジェラルドを引用しています。

フィッツジェラルドの「他人と違う何かを語りたければ、他人と違った言葉で語れ」という文句だけが僕の頼り（参 3）

評論家畑中佳樹は、「アメリカ小説のファン」である村上春樹が、自分の好きなアメリカ小説から影響を受け「たまたま純文学を書き始めた」のだと述べています。（参 29）ここでいう「アメリカ小説」というのは、フォークナー、ヘミングウェイ、スタインベックなどとは対照的なところにある大衆小説（ハードボイルド、SF、ホラーなど）のことです。

しかし、アメリカ小説の影響だけで、たとえば次の文章が書けるでしょうか。『風の歌を聴け』の「祖母」が亡くなったときの一節です。

僕が臉を下ろすと同時に、彼女が 79 年間抱き続けた夢はまるで舗道に落ちた夏の通り雨のように静かに消え去り、後には何ひとつ残らなかった。(10p)

4-2 『1973 年のピンボール』

第 2 作『1973 年のピンボール』初出は、雑誌『群像』1980 年 3 月号に掲載されました。『風の歌を聴け』に続き「僕」と「鼠」が登場し、「僕」の章と「鼠」の章が交互に進んでいきます。「鼠」の物語では、無人燈台や霊園の描写等がありますが、村上春樹の故郷西宮や芦屋を彷彿とさせ、なんともいえないメランコリーが漂い、読むものの胸に迫ってきます。

さて、『1973 年のピンボール』の「僕」の物語は、ある日曜日、ひとり暮らしの「僕」が「目を覚ました時、両脇に双子の女の子がいた」(12p) という、従来の日本の小説には考えられない、しかし、ブローティガンやヴォネガットを読んでいるとそう驚くべきことではない作品として成立しています。

そして、

双子を見わける方法はたったひとつしかなかった。彼女たちが着ているトレーナー・シャツである。すっかり色のさめたネイビー・ブルーのシャツで胸には白抜きの数字がプリントされていた。ひとつは「208」、もうひとつは「209」である。(36P) とあるのですが、この「208」という数字、ブローティガンの『アメリカの鱒釣り』(参 25) に似た部分を見いだすことができます。「〈アメリカの鱒釣りホテル〉二〇八号室」という章に、「二人は〈二〇八〉という名の猫を飼っていた。」(131p) から、なぜ〈二〇八〉なのか説明が続くのです。尊敬を込めた拝借と言うか、村上春樹流ユーモアのなせるわざなのでしょう。

とにかく、『1973 年のピンボール』には、双子の「208」「209」の存在、「配電盤」のお葬式等、「それはいったい何ですか？」と尋ねたくなる不思議キーワードが出現してきます。『1Q84』の「リトル・ピープル」まで続く、読者にとっての村上春樹ワールドクエスチョンのはじまりと言ってよいでしょう。

そして、この小説の後半は、幻のピンボール・マシーンを探すという、「Seek and Find」「探し求めて、探し出す」(参 8) の物語になります。「シーク・アンド・ファインド」は、例えばレイモンド・チャンドラーのハード・ボイルド小説の手法で、村上春樹は自分の作品に取り込もうと考えたのです。

5. 新しい出発『羊をめぐる冒険』

シーク・アンド・ファインドの物語が確立するのは、長編第 3 作『羊をめぐる冒険』です。『風の歌を聴け』『1973 年のピンボール』そしてこの作品は、いわゆる「僕と鼠の三部作」と呼ばれてもいます。そして、

この『羊をめぐる冒険』は僕が専業作家となって最初に書いた小説である。

(参 31)

村上春樹としては珍しいことに、重要な舞台となる北海道へ取材に行き、羊の調査もしています。なぜ羊の調査をしたのかは、『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』(参 32)

に書いてあります。

5-1 『グレート・ギャツビー』そして『ロング・グッドバイ』

村上春樹は、おそらく 1992 年のパークレーでの講演で『羊をめぐる冒険』について次のように説明したそうです。「シーク・アンド・ファインド」がわかりやすく語られていますので、紹介します。

この小説はストラクチャーについてはレイモンド・チャンドラーの小説の影響を色濃く受けています。僕は彼の小説の熱心な読者で、幾つかの作品は何度も読み返しました。だから僕はこの小説の中で、その小説的構図を使ってみようと思ったのです。まず第一に主人公が孤独な都市生活者であること。それから、彼が何かを探そうとしているうちに、様々な複雑な状況に巻き込まれていくこと。そして彼がその何かをついに見つけたときには、既に失われてしまっていることです。これは明らかにチャンドラーの用いた手法です。僕はそのような構図を使用して、この『羊をめぐる冒険』という小説を書きました。（参 32）

また、レイモンド・チャンドラー著村上春樹訳『ロング・グッドバイ』（参 33）の「訳者あとがき 準古典としての『ロング・グッドバイ』」には「チャンドラーとフィッツジェラルド」という章を設け、

僕はある時期から、この『ロング・グッドバイ』という作品は、ひょっとしてスコット・フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』（参 34）を下敷きにしているのではあるまいかという考えを抱き始めた。（547p）

と書いています。

では、『グレート・ギャツビー』『ロング・グッドバイ』のそれぞれの概略を見てみましょう。

☆『グレート・ギャツビー』（1925 年）

物語の語り手ニック・キャラウエイはニューヨーク郊外に住む独身の証券マン。隣の大邸宅の住人は、毎夜大パーティを催すジェイ・ギャツビー。ニックの親戚デイジーがニック達の家の入江向かいに大金持ちの夫トム・ブキャナンと暮らしている。実は、ギャツビーは昔デイジーと愛しあっていたのだが、貧しさゆえにデイジーとの結婚を反対された。ギャツビーが第一次大戦に兵士としてヨーロッパへ行っている間に、デイジーはトムと結婚してしまう。やがて、富と財産を手に入れたギャツビー、ニックはギャツビーに頼まれて、デイジーとギャツビーが逢えるように計らい二人は再会する。が、デイジーの夫の知るところとなり、悲劇へと進む。

☆『ロング・グッドバイ』（1953 年）

ロス・アンジェルス私立探偵フィリップ・マーロウは、ある日酔いつぶれたテリー・レノックスという青年と知り合う。しばらくして、億万長者の娘でありテリーの妻であるシルヴィアが殺され、テリーに容疑がかかる。マーロウは、テリーがメキシコへ逃げる手助けをするが、テリーは逃亡先のメキシコで自殺する。その後、「次にコーヒーをつくる時に僕のぶんを一杯カップに注いでバーボンを少し加えてくれ。煙

草に火をつけ、その隣に置いてほしい。そのあとでなにもかも忘れてもらいたい。」と書いてあるテリーからの手紙が届く。それから、アルコール依存症の作家ロジャー・ウェイドに関して金髪美女であるその妻アイリーンから依頼を受ける。また、シルヴィアの姉が近づき、億万長者の父親ハーラン・ポッターと面会させられる。やがて、思いがけない結末が訪れる。

そして、チャンドラーの手法を真似たという『羊をめぐる冒険』です。

☆『羊をめぐる冒険』（1982年）

1978年9月、妻と別れた29歳の「僕」は、特殊な耳を持つガールフレンドと「羊」を探しに北海道へ行く。右翼大物の秘書から、「僕」が友人と共同経営している広告代理店の広告に使った羊の群れの写真が問題とされ圧力が加かったためである。その羊の写真は友人「鼠」が僕に送ってきたものだった。「僕」は札幌のいるかホテルに滞在し、羊博士と出会う。博士から「鼠」が送ってきた写真は、かつて羊博士の牧場であり現在は富豪の別荘だとわかる。加えて、「鼠」らしい青年が数ヶ月前博士を訪ねてきていたことを知る。「僕」はガールフレンドと共にその十二滝町へ向かう。別荘にたどり着くとガールフレンドは消え、「羊男」が登場する。実は「鼠」は自殺しており、「僕」は幽霊の「鼠」と再会する。そして・・・

以上の三作品で、「ニック・キャラウエイ」「フィリップ・マーロウ」「僕」は語り手です。それに対し、語られるサイドの『グレート・ギャツビー』のジェイ・ギャツビーと『ロング・グッドバイ』のテリー・レノックスは、ニックとマーロウにとって「直感的にして背反的な、そして抜き差しならぬほどの深い思い」を抱かれます。そして、そのことが「どちらの作品においても、物語の展開の大きな要になっている」と、村上春樹は書いています。（参 33）

このことは『羊をめぐる冒険』の「鼠」に関しても同じことが言えます。

三作品の二人の関係が、『羊をめぐる冒険』で「僕」と「鼠」との友情の物語として発展していくのです。『羊をめぐる冒険』では、「僕」は、右翼大物秘書から羊の写真をくれた人物を言えと迫られますが拒否します。その人物とは友人の「鼠」だからです。『ロング・グッドバイ』で、フィリップ・マーロウが警察でひどい目にあっても決してテリー・レノックスについて口を割らなかったように。

続いて、『ロング・グッドバイ』と『羊をめぐる冒険』の似ている部分を見てみましょう。

★『ロング・グッドバイ』

a <ヴィクターズ>に行き、ギムレットを一杯注文してくれ。そして次にコーヒーをつくる時に僕のぶんを一杯カップに注いで、バーボンを少し加えてくれ。（119p）

b 訊いてまわれたいのことは簡単にわかるという事実に、人人があまり思い当たらないことです。（418p）

c ヴェリンジャーの牧場の入口の描写（164p）

d ハーラン・ポッター邸宅の描写（314～315p）

★『羊をめぐる冒険』

- a それからジェイにもよろしく。僕のぶんのビールを飲んでおいてくれ。(111p)
- b 手間さえ惜しまなければ大抵のことはわかるものだ。(14p)
- c 「僕」とガールフレンドが十二滝町職員の車で「十二滝町営緬羊飼育場」入口に着いたところの描写。(275p)
- d 「右翼大物」の邸宅の描写(94～96p)

このように、レイモンド・チャンドラーのテクニクを取り込んだ『羊をめぐる冒険』は、「ある西海岸の読者はこの小説をチャンドラーの『ビッグ・スリープ』をもじって『ビッグ・シープ』と呼んでいます。僕はそれを光栄だと思っわけですが。」(参32) だそうです。ちなみに『ビッグ・スリープ』は、『**The Big Sleep**』、日本語訳『大なる眠り』として出版され、1946年ハリウッドでハンフリー・ボガード主演で映画化、日本題名は『三つ数えろ』です。村上春樹は、「チャンドラー映画の中ではベストの作品。かのウィリアム・フォークナーがシナリオ・ライターの一人としてクレジットに名を連ねている。」(参38)『ロング・グッドバイ』は1973年にエリオット・グールド主演で映画化されています。

映画といえば、1930年代を中心にアメリカ映画で活躍したマルクス兄弟の『ダック・スープ(我輩はカモである)』の鏡の場をヒントにして次の場面を書いたそうです。(参38)

僕は台所に新しい缶ビールを取りに行った。階段の前を通る時に鏡が見えた。もう一人の僕もやはり新しいビールを取りに行くところだった。我々は顔を見合わせてため息をついた。我々は違う世界に住んで、同じようなことを考えている。まるで「ダック・スープ」のグルーチョ・マルクスとハーポ・マルクスみたいに。(341p)

この場面は邦題の『我輩はカモである』と書かずに原題をそのままカタカナ表記で『ダック・スープ』と書いているのですが、初期に「都会派」と呼ばれた村上春樹の文体があります。その文体のルール、作家の美意識から言って「『我輩はカモである』のグルーチョ・マルクスやハーポ・マルクスみたいに」とは書けないように感じます。ちなみに私は、ハーポ・マルクスが大好きです。マルクス兄弟は、日本のコメディアン、中高年にはなじみ深いドリフターズにも影響を与えています。

5-2『雨月物語』と『羊をめぐる冒険』

さて、『グレート・ギャツビー』『ロング・グッドバイ』『羊をめぐる冒険』と同じように男同士の友情(愛情)を描いた物語が我が国江戸時代に創られています。上田秋成の『雨月物語』のなかの『菊花の約(きくかのちぎり)』です。村上春樹は、2002年刊行の『海辺のカフカ』で、明確に『雨月物語』を上げ、色々引用していますが、『菊花の約』について登場人物「大島さん」に以下のように語らせています。

二人の武士が友人となり、義兄弟の契りを結ぶ。これは侍にとってはとても大事な関係だ。義兄弟の契りを結ぶというのは、すなわち命を預けあうことだからね。相手のためにはすすんで命を落とす。それが義兄弟というものだ。

二人は遠く離れた場所に住み、別の主君に仕えている。菊の花の咲くころにあな

たのところになにがあってもうかがいます、とひとりの侍が言う。それでは用意をしてあなたを待っていきましょう、ともうひとりが言う。しかし友を訪れることになっていた侍は藩のトラブルに巻きこまれ、監禁の身になってしまう。外に出ることが許されない。手紙を送ることも許されない。やがて夏が終わり、秋が深まり、菊の花が咲く季節がやってくる。このままでは友と交わした約束を果たすことができない。侍にとって約束はなによりも大事なことだ。信義は命よりも大切なものだ。その侍は腹を切り、魂となって千里の道を走り、友の家を訪れる。そして菊の花の前で心ゆくまで語り合っ、そのまま地表から消えてしまう。とても美しい文章だ。(参 40)

以上の最後のところの原文です。

いにしへの人いふ。『人一日に千里(ちさと)をゆくことあたはず。魂(たま)よく一日に千里をもゆく』と。此のことわりを思ひ出でて、みづから刃に伏し、今夜(こよひ)微風(かぜ)に乗てはるばる来り菊花の約(ちかひ)に赴(つ)く。(参 39)

そして、『羊をめぐる冒険』にはこういう場面があります。北海道の「鼠」の牧場で「僕」が「鼠」と「再会」したときの会話です。

「君はもう死んでいるのだろうか？」

鼠が答えるまでにおそろしいほど長い時間がかかった。ほんの何秒であったのかもしれないが、それは僕にとっておそろしく長い沈黙だった。口の中がからからに乾いた。

「そうだよ」と鼠は静かに言った。「俺は死んだよ」(350p)

この場面は、『菊花の約』で「魂」となって「千里の道」を走り友に会うところと同じような心に染みる哀切感がただよっています。そして、「僕」が「鼠」のために最後に「一仕事」をするところ、『羊をめぐる冒険』は『菊花の約』と同じだと感じられます。

村上春樹は、こういう、別の世界に逝ってしまったひとがこの世にやってきて愛するひとと逢うことを<もののあわれ>なのだと、海外のインタヴューに語っています。

(インタヴュー) 同時にあなたの書くものは、伝統的な日本の詩歌にとって重要なくもののあわれ>の痕跡といたしますか、「ものごとの胸をさすようなメランコリー」を帯びています・・・

村上 僕らは、ひとつの世界、この世界に生きていますが、しかし、その近辺には別の世界がいくつも存在しているのだと思います。(略)それはたいへん東洋的で、アジア的な考え方だと思います。日本や中国では、並行する二つの世界があって、そのあいだにある架け橋が、一方の世界から他方の世界への移動を難しくしすぎないようにしている、と考えられています。西洋ではそんなわけにはいきませんね。この世界はこの世界、あの世界はあの世界、といった具合になっています。しかしアジア文化はちがうんです。僕が思うに、<もののあわれ>が描いているのは、こうした状況です。(参 41)

そして、このインタヴューが述べているように、村上春樹はアメリカの小説が好きなかげく「アメリカ文学にじかにアダプトしてしまった、接着してしまった」(参 42)

だけではなく、日本の〈もののあわれ〉が描かれているがために、世界中の読者を喜ばせる作家になったと言えるでしょう。

5-3 「世界は村上文学をどう読むか」

2006年3月、世界中の翻訳家、作家、編集者が集まり、国際交流基金主催「春樹をめぐる冒険—世界は村上文学をどう読むか」というシンポジウム&ワークショップが、東京、札幌、神戸で開催されました。私は、3月29日村上春樹の母校兵庫県立神戸高等学校での「神戸プログラム」に参加しました。カナダ、韓国、チェコ、香港の翻訳者がパネリストでした。なかでも、参加者とチェコの翻訳者との質疑応答が忘れられません。以下のようなものでした。

質問者（参加者）：「村上春樹は（チェコの作家）カフカの影響を受けていると思いますか？」

チェコの翻訳者（トマーシュ・ユルコヴッチ）：「いいえ。村上春樹が影響を受けているのは、上田秋成です。」

司会者（四方田犬彦／よもたいぬひこ）：「(なかば興奮気味に)うげっ！うげっ！」

なお、シンポジウム&ワークショップの詳細は、図書『世界は村上春樹をどう読むか』と雑誌『文学界 2006年6月号』にあります。神戸高校で私が聞いたこの質疑応答の記載はありませんが、現在でも日本の文芸評論家がアメリカ文学からの影響力を指摘しているのに対し、村上春樹文学を読み解く鍵として、外国の人からの重要な発言であると私は考えます。

『世界は村上春樹をどう読むか』を見ると、「春樹をめぐる冒険—世界は村上文学をどう読むか」にロシアから3人の翻訳家、作家が参加しています。その中のドミートリー・コヴァレーニンは最初にロシアに村上春樹を紹介した人です。コヴァレーニンは、1996年、『羊をめぐる冒険』ロシア語訳を無断でインターネットに公開、それが大反響を得て1998年ロシアで出版へと至ったのです。1993年、新潟で通訳として働いていた彼は、初めて『羊をめぐる冒険』を読んで「これだ！」と感じたそうですが、その理由を雑誌『外交フォーラム 2003年1月号』（参11）に書いています。

①この本にはストーリーがあった。それもとびきりのストーリーが。

②二ページ目を読むころには、作家が日本人であることを忘れていた。本がすっかり好きになってぼくは読んでいたのだ。主人公の「ぼく」がまるでぼくが感じるように生きていたからだ。

③それでも、読了してから思ったのは、これは日本人じゃないと書けない、ということだった。なぜなら、その本は完璧な禅と瞑想そのもので、読者をその間だけでも日本人にしてしまうからだ。（44p）

このコヴァレーニン氏の「理由」は、村上春樹の作品が世界中で読まれる理由を簡単に要約しているように私には感じられます。

村上春樹自身は、次のように語っています。

僕の作品がある程度外国で受け入れられているとしたら、それはやはり、僕が日本人であること、日本の作家であるということに対して意識的だからだと思います

よ。外国に行って、たとえば朗読会なんかやって話をすると、僕がグローバルであるということよりは、僕が日本的であるということに対する興味が大きい。これほどニュートラルな文体で物語を書きながら、どうしようもなくその物語の質が日本的であるということに対して外国の人はかなり意識しているみたいな気がする。（参 12 参 41）

ロシアのコヴァレーニンが『羊をめぐる冒険』で村上春樹に魅了されたように、『羊をめぐる冒険』でハルキストになった読者は数多いようです。そして、この作品から世界の「ハルキ・ムラカミ」へと飛躍していくのでした。

そしてこの『羊をめぐる冒険』は翻訳されて海外に紹介された僕の最初の作品となった。（1989 年）そういう意味でもこの小説は僕にとっては大きな意味を持っている。この小説を読んだアメリカ人の多くは「これは純粋なポリティカル・ノヴェルだ」と僕に言った。（参 13）

6. 終りに

本日は、村上春樹が初期の作品『風の歌を聴け』『1973 年のピンボール』『羊をめぐる冒険』で、大好きなアメリカの小説から影響を受けていること、それゆえに初期にはアメリカナイズされていると批評された村上春樹が、実は、特に『羊をめぐる冒険』は、子ども時代から愛読していたという『雨月物語』に影響された作品でもあるということをお話ししました。私は最近になってやっと、『羊をめぐる冒険』が『菊花の約』と同じように、最後友人のために「仇を討つ」友情の物語なのだと気が付き感動を新たにしました。「配電盤」や「羊男」が何なのかはまだ謎のまま残っていますが、これからも読みなおしていくうちに、いつか私なりに悟ることができるかもしれません。

今年 6 月スペインで、村上春樹は「非現実的な夢想家として」と題する、3 月 11 日の大震災、特に福島原発事故についての感動的なスピーチを行いました。カフカ賞、エルサレム賞の時の英語でのスピーチとは違い、今回は特に日本語で行われました。私はこの日本語で行われたスピーチを聴き、日本には村上春樹が居る、いま村上春樹と同じ時代に生きているのだと、改めて感じることができました。

皆様の貴重なお時間をいただきましたが、この講座をきっかけに、いっそう村上春樹の作品を楽しんでいただければ、ファンの一人としてこの上もない喜びです。ありがとうございました。

◎村上春樹略歴

- 1949年1月12日 京都府京都市伏見区で生まれる。すぐに西宮市夙川に引っ越しをする。
- 1955年4月 西宮市立浜脇小学校入学
- 1957年12月24日 新設の西宮市立香櫨園小学校へ転校
- 1961年3月 西宮市立香櫨園小学校卒業
- 4月 芦屋市立精道中学校入学、その直後芦屋市に引っ越しをする。
- 1964年4月 兵庫県立神戸高等学校入学
- 1968年4月 早稲田大学第一文学部演劇科入学
- 1971年 陽子夫人と学生結婚
- 1974年 ジャズ喫茶店「ピーター・キャット」開業
- 1975年3月 早稲田大学第一文学部演劇科卒業
- 1979年 『風の歌を聴け』第22回群像新人文学賞受賞
- 1980年6月 『1973年のピンボール』刊行
- 1981年 店を譲り専業作家になる。
- 1982年 『羊をめぐる冒険』野間文芸新人賞受賞
- 1985年 『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』第21回谷崎潤一郎賞受賞
- 1986年～1987年 イタリアとギリシャに住む。
『ノルウェイの森』刊行、大ベストセラーになる。
- 1988年 『ダンス・ダンス・ダンス』刊行、こちらもベストセラーに。
- 1990年 日本帰国
- 1991年 米国プリンストン大学客員研究員として招聘される。
- 1994年 『ねじまき鳥クロニクル』第1部、第2部刊行
- 1995年1月 阪神・淡路大震災
- 3月 一時帰国する。地下鉄サリン事件
- 8月 『ねじまき鳥クロニクル』第3部刊行
- 1996年 『ねじまき鳥クロニクル』第47回読売文学賞受賞
- 1999年5月 『約束された場所で—underground 2』第2回桑原武夫学芸賞受賞
- 2000年 神奈川県大磯町に転居
- 2002年 『海辺のカフカ』上・下刊行
- 2006年3月 フランツ・カフカ賞受賞（チェコ）
- 9月 フランク・オコナー国際短編賞を受賞（アイルランド）
- 2007年1月1日 朝日賞受賞
- 2007年 ベルギー、リエージュ大学より名誉博士号授与
- 2007年9月25日 第1回早稲田大学坪内逍遙大賞受賞
- 2008年6月3日 アメリカ、プリンストン大学文学博士名誉学位授与
- 2008年10月 アメリカ、UCバークレー校第1回バークレー日本賞授与
- 2009年1月 エルサレム文学賞受賞（イスラエル）
- 2009年5月 『1Q84』BOOK1、2刊行
- 2009年11月 第63回毎日出版文化賞受賞
- 2009年12月 スペイン芸術文学勲章授与
- 2010年4月 『1Q84』BOOK3刊行
- 2011年6月9日 スペイン第23回カタルーニャ国際賞受賞

◎村上春樹に影響を与えた作家達略歴

1. 「スコット・フィッツジェラルド」

1896-1940 アメリカ合衆国北西部ミネソタ州セントポール生まれ。失われた世代を代表する作家の一人。プリンストン大学中退。第一次世界大戦時、陸軍に入隊、南部アラバマ州モントゴメリーに駐屯中、州最高判事の娘ゼルダと出会い恋に落ちる。自伝的な第1作『楽園のこちら側』によりベストセラーになり、ゼルダと結婚。代表作『グレート・ギャツビー』は、1974年ロバート・レッドフォード主演で映画化されているが、現在レオナルド・ディカプリオで撮影中とのこと。

2. 「レイモンド・チャンドラー」

1888-1959 アメリカ合衆国シカゴ生まれ。ハードボイルド作家。父親のアルコール中毒が原因で両親が離婚。母と共に渡英しロンドンで成長する。1912年渡米。第一次世界大戦に従軍後、ロサンゼルス石油企業連合で簿記係として働く。1932年解雇されてしまったので、生活費を稼ぐため、パルプ雑誌（安っぽい雑誌）に『脅迫者は射たない』を掲載。長編第1作『大いなる眠り』で登場した「フィリップ・マーロウ」はハードボイルド探偵として最も有名である。「タフでなければ生きて行けない。優しくなれなければ生きている資格がない」のセリフで知られる『プレイバック』、他に『ロング・グッドバイ』『さらば愛しき女よ』がある。

3. 「リチャード・ブローティガン」

1935-1984 アメリカ合衆国ワシントン州生まれ。作家、詩人。1955年サンフランシスコに移住、アメリカ西海岸で盛り上がり始めていたビート族の運動に共感し詩集を自費出版したり詩の朗読会を催す。小説は『ビッグ・サーの南軍将軍』でデビュー。『アメリカの鱒釣り』は二百万部売れ、カルト的人気を博しヒッピーの教祖的存在となる。カリフォルニア・カウンターカルチャーの旗手と呼ばれた。1972年以降はモンタナで隠遁生活に入る。1984年、銃で自殺。自殺前の作品は一万五千部しか売れなかった。

4. 「カート・ヴォネガット（ジュニア）」

1922-2007 アメリカ合衆国インディアナ州生まれ。ドイツ系四世。コーネル大学で生化学を学ぶ。第二次世界大戦中ドイツ軍の捕虜となり、ドレスデン大空襲を体験。戦後会社勤めを経て、SF短編『バーンハウス効果』で作家デビュー。1963年発表のSF小説『猫のゆりかご』はベストセラーになった。代表作は、ドレスデンの大空襲体験に基づくSF仕立ての『スローターハウス 5』、20世紀アメリカ文学の最高傑作の1つとされ、反体制の若者たちの間で熱狂的に支持されるようになった。他に『チャンピオンたちの朝食』などがある。

5. 「トルーマン・カポーティ」

1924-1984 アメリカ合衆国ニューオリンズ生まれ。4歳の時両親が離婚、親戚の家を転々として、ほとんど学校に行けなかった子ども時代だった。17歳で『ニュー Yorker』誌で働き、19歳の時、短編『ミリアム』でO.ヘンリー賞を受賞注目される。23歳で長編『遠い声遠い部屋』を出版、「恐るべき子ども」と呼ばれた。その後中編『ティファニーで朝食を』が映画化されるなど、華やかな話題も提供した。1965年、『冷血』でノンフィクション・ノベルというジャンルを切り開いたが、以降アルコールと薬物中毒に陥り没落していった。2005年の映画『カポーティ』は『冷血』を書き上げるまでを描いた伝記映画で、カポーティを演じた俳優はアカデミー主演男優賞を受賞した。

6. 「上田秋成」

1734-1809 (享保 19-文化 6) 摂津の国曾根崎生まれ。江戸中期の浮世草子、読本作者、国学者、歌人。4歳で商家上田氏の養子となる。5歳のおり重い疱瘡にかかり指が2本動かなくなる。27歳で結婚、翌年養父の死により家督を継ぐ。やがて、国学への深い関心から賀茂真淵門の加藤宇万伎に師事する。30歳になって浮世草紙の小説を書きはじめたが、明和5年読本『雨月物語』を書き上げた。主として中国白話小説を主題とする怪談小説集だが、独自の怪奇的幻想が生かされ、国学思想が密かに全体を貫いている。初稿から8年経った43歳の頃に刊行された。60歳で妻に先立たれ盲目に近くなり、京都で隠遁生活を送り76歳で没した。1953年、溝口健二監督で『雨月物語』が映画化され、ヴェネツィア国際映画祭銀獅子賞を受賞した。

◎参考資料一覧

1. 雑誌

	誌名	ページ	備考
1	anan 2010年10月27号 No.1730	6～7p	溝口蔵
2	国文学 解釈と教材の研究 1985年3月号 第30巻第3号	8p	兵庫県立図書館蔵
3	群像 1979年6月特大号 第24巻第6号	114p 118p	兵庫県立図書館蔵
4	村上春樹ブック 文学界 (1991) 4月臨時増刊 第45巻第5号	37p 120p	兵庫県立図書館蔵
5	考える人 2010年夏号 No.33 特集村上春樹ロングインタビュー	66p 83p	溝口蔵
6	キネマ旬報 1980年3月下旬 第782号 親子間のジェネレーション・ギャップは危険なテーマ (Z77/3/1980-1 請求記号)	89p	兵庫県立図書館蔵
7	群像 1980年3月特大号 第35巻第3号 1973年のピンボール	6～96p	兵庫県立図書館蔵
8	ユリイカ 1982年7月号 第14巻第7号 対話チャンドラーあるいは都市小説について	113p	兵庫県立図書館蔵
9	文学界 1985年8月号 第39巻第8号 「物語」のための冒険	48p	兵庫県立図書館蔵
10	文学界 2006年6月号 第60巻第6号 ワークショップ 世界は村上春樹をどう読むか	119～174p	兵庫県立図書館蔵
11	外交フォーラム 2003年1月号 No.174 村上春樹ワンダーランドinモスクワ	44～45p	兵庫県立図書館蔵
12	文学界 2003年4月号 第57巻第4号 村上春樹ロングインタビュー	38p	兵庫県立図書館蔵

2. 図書

	書名	著者	出版社	出版年	請求記号	備考
13	村上春樹全作品 1979～1989 1	村上春樹	講談社	1990	918.68/287/1	「風の歌を聴け」「1973年のピンボール」 兵庫県立図書館蔵
14	ウォーク・ドント・ラン 村上龍×村上春樹	村上龍 村上春樹	講談社	1981		123p 124p 125～126p 129p 溝口蔵
15	辺境・近境	村上春樹	新潮社	1998	914.6/1422	「神戸まで歩く 第一章」 兵庫県立図書館蔵
16	村上朝日堂	村上春樹	新潮社	1987		文庫版 56p 136～137p 溝口蔵
17	世界文学全集 1～48、別巻1～7		河出書房新社	1959～1963	908/30/1-1～1-55	兵庫県立図書館蔵
18	世界の歴史 第1～16、別巻		中央公論社	1960～1962	209/1/1～17	兵庫県立図書館蔵
19	「これだけは、村上さんに言っておこう」と世間の人々が村上春樹にとりあえずぶっつける330の質問に果たして村上さんはちゃんと答えられるのか？	村上春樹	朝日新聞社	2006	914.6/1698	80p 兵庫県立図書館蔵 兵庫

	書名	著者	出版社	出版年	請求記号	備考
20	ノルウェイの森 上・下	村上春樹	講談社	1987	913.6/484/ 1,2	兵庫県立図書館蔵
21	イアン・ブルマの日本探訪	イアン・ブルマ著 石井信平訳	ティビーエス・ブリタニカ	1998		「日本人になるということ」81p 溝口蔵
22	村上春樹全作品 1979～1989 3	村上春樹	講談社	1990	918.68/287/ 3	「中国行きのスロウ・ボート」9～40p 兵庫県立図書館蔵
23	ティファニーで朝食を	トルーマン・カポーティ著 村上春樹訳	新潮社	2008	933.7/103	兵庫県立図書館蔵
24	愛のゆくえ	リチャード・ブローティガン著 青木日出夫訳	新潮社	1975		溝口蔵
25	アメリカの鱒釣り	リチャード・ブローティガン著 藤本和子訳	新潮社	2005		文庫版 溝口蔵
26	スローターハウス5	カート・ヴォネガット・ジュニア著 伊藤典夫訳	早川書房	1978		溝口蔵
27	チャンピオンたちの朝食	カート・ヴォネガット・ジュニア著 浅倉久志訳	早川書房	1989		溝口蔵
28	「そうだ、村上さんに聞いてみよう」と世間の人々が村上春樹にとりあえずぶっつける282の大疑問に果たして村上さんはちゃんと答えられるのか？	村上春樹	朝日新聞社	2000	914.6/1701	38p 兵庫県立図書館蔵
29	村上春樹スタディーズ 01	栗坪良樹ほか 編	若草書房	1999	910.26/876/ 1	「アメリカ文学と村上春樹」30～37p 兵庫県立図書館蔵
30	1Q84 a novel BOOK 1、2、3	村上春樹	新潮社	2009 2010	913.6/4260/ 1,2,3	兵庫県立図書館蔵
31	村上春樹全作品 1979～1989 2	村上春樹	講談社	1990	918.68/287/ 2	「羊をめぐる冒険」 兵庫県立図書館蔵
32	ハルキ・ムラカミと言葉の音楽	ジェイ・ルービン著 畔柳和代訳	新潮社	2006	910.26/179 3	96p 107p 兵庫県立図書館蔵
33	ロング・グッドバイ	レイモンド・チャンドラー著 村上春樹訳	早川書房	2007	933.7/90	兵庫県立図書館蔵
34	グレート・ギャツビー	スコット・フィッツジェラルド著 村上春樹訳	中央公論新社	2006	933.7/82	兵庫県立図書館蔵
35	F・S・フィッツジェラルド事典	ロバート・L. ゲイル著 前田絢子訳	雄松堂出版	2010	930.2/1374	兵庫県立図書館蔵
36	世界ミステリー映画大全	北島明弘	愛育社	2007	778/250	478p 兵庫県立図書館蔵
37	やがて哀しき外国語	村上春樹	講談社	1994	914.6/1001	116p 兵庫県立図書館蔵
38	映画をめぐる冒険	村上春樹	講談社	1985		15p 23p 溝口蔵
39	日本の古典をよむ 19		小学館	2008	918/32/19	「雨月物語 菊花の約」12～39p 兵庫県立図書館蔵

40	海辺のカフカ 上	村上春樹	新潮社	2002	913.6/4095 /1	390p 兵庫県立図書館蔵
41	夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです 村上春樹インタビュー集1997-2009	村上春樹	文芸春秋	2010	910.26/209 9	154~155p 158~159p 兵庫県立図書館蔵
42	村上春樹と柴田元幸のもうひとつのアメリカ	三浦雅士	新書館	2003	910.26/134 8	26p 兵庫県立図書館蔵
43	世界は村上春樹をどう読むか	柴田元幸ほか編	文芸春秋	2006	910.26/178 8	兵庫県立図書館蔵
44	英語文学事典	木下卓ほか編著	ミネルヴァ書房	2007	930.3/46	139~140p 344~ 345p 482~483p 528~529p 兵庫県立図書館蔵
45	フィッツジェラルド 20世紀英米文学案内 7	野崎孝編	研究社出版	1976	930.2 /42 /7	「楽園のこちら側」56~ 68p 兵庫県立図書館蔵
46	世界ミステリ全集 5	レイモンド・チャンドラー	早川書房	1972	908/7/5	「さらば愛しき女よ」 「プレイバック」 兵庫県立図書館蔵
47	20世紀アメリカ短篇選 下	トルーマン・カポーティ著 大津栄一郎 編訳	岩波書店	1999	X1/32/337 -2	「ミリアム」 215~ 241p 兵庫県立図書館蔵
48	遠い声遠い部屋	トルーマン・カポーティ	新潮社	1969	933/354	兵庫県立図書館蔵
49	新潮日本文学辞典	磯田光一	新潮社	1988	910.3/105	122~126p 兵庫県立図書館蔵

3. 新聞

—兵庫県立図書館蔵—

	新聞名	請求記号	備考
50	図書新聞 第32巻昭和58年／第1651号～第1699号	S105/32	1983年1月15日 1~2p
51	毎日新聞 2010年12月10日(夕)		7p 「トークイベント 村上春樹をたどるたび」

4. CD-ROM

	タイトル	備考
52	『村上朝日堂』 スメルジャコフ対織田信長家臣団 CD-ROM版	1998/7/20分 溝口蔵